

社会科（公民的分野）における授業実践

学校名：北見市立小泉中学校 授業者：斎 一成
生徒：第3学年 実施時期：3月

1 題材 「水と世界と私」 ～義務教育最後の国際理解学習（社会科）～

2 題材について （仮設1に関わって）

身近な物事に目を向け、地球的視点で見つめ調べることによって、自分と世界とのつながりを感じ、様々な問題を自分との関わりとしてとらえることができるであろう。

さまざまな国際理解学習に触れ、明確な答えのない国際問題に戸惑う彼らに対し、“それらは「自分の問題」「自分にも関わられる問題」である”と捉えて欲しいと考えた。生徒による活動は少ないのだが、収集していた資料を用いて教材化を図ろうと試みこの実践を行った。

当該学年は、総合的な学習の時間においてディベートを通じた「国際理解に関する学習」を終了させ、児童労働が私たちの生活に関係していたこと、その犠牲の上に私たちの経済的な豊かさがあったこと、について考えた。その後、教科の時間の中で、世界の抱える諸問題について追究する取り組みを行った。とりわけ、『一枚の看板（バーン村）』からは、「支援は必要なのか、あるいはしない方がましなのか？」といった、決着のつかない“もやもや感（＝葛藤）”が生徒の中に残った。それだけでも意義があるのだが、その“もやもや”が、最終的には自分自身の行動にもつながっているということに気付かせたいと考えた。

本時は、義務教育最後の社会科（公民）の学習である。私たちにとって、究極に身近な存在である“水”を通し、「国際協力とは、募金や協力事業ばかりではなく、普段の生活からも実践できる」ことをつかんで卒業を迎えて欲しいと願う。

<学習計画>

国際理解学習に関わる内容	領域	時数
ディベート①「児童労働の実態は解決できる」	総合的な 学習の時間	30
ディベート②「私たちは豊かな生活をおくっている」		
ODA・NPOの活動を調べよう（教科書の単元から特設）	社会科 公民的分野	1
貿易ゲーム（開発教育教材）～経済格差と利益を巡って～		1
一枚の看板<バーン村>（開発教育教材）～援助の在り方とは～		1
水と世界と私 <本時>		1

3 本時の目標

- （1）国際協力とは特別なことではなく、自分の普段の生活からも実践できることをつかむ。
- （2）“水は当たり前で飲める・使える”という考えを省みることができる。

4 本時の学習 ※別項に記載

5 本時の評価

- （1）国際協力とは特別なことではなく、自分の普段の生活からも実践できることをつかめたか。
- （2）“水は当たり前で飲める・使える”という考えを省みることができたか。

※4 本時の活動 ⇒前項の続き

過程	生徒の活動	教師の支援	形態	留意点
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> リーフレットを読む 感想を述べる 	<ul style="list-style-type: none"> unicefのリーフレットを配布 「水」が今日のテーマと告げる 	一斉	リーフレット ※資料Ⅰ
	今日、最も身近な「水」から世界を見てみよう			
ひろげる	<ul style="list-style-type: none"> グループで話し合う 内容を黒板に書き発表する 	<ul style="list-style-type: none"> 800L ※分類「生活水」の一人平均値では365L 解答プリントを配布する 	グループ	自由な発想 共感的理解 ※資料Ⅱ ①観察による評価
	私たちの水 世界の水	<ul style="list-style-type: none"> ケニアでは1日に平均で 5L/1人 世界の平均は174L、ある程度の生活水準を維持するには80Lの水が必要と言われる。 安全と言われる水道水があるのは 7～10カ国 		
	<ul style="list-style-type: none"> 予想する 話し合う 発言する 感想を述べる 	<ul style="list-style-type: none"> 日本はその中のひとつである その水でトイレを流している 	※欄外注釈	
	地球の水	<ul style="list-style-type: none"> 日本はその中のひとつである その水でトイレを流している 		
つなげる	<ul style="list-style-type: none"> 資料を読む 感想意見を記入 	<ul style="list-style-type: none"> 資料を配布する (=0.008%) 資料配布 ※深く追究せずに紹介する程度 クイズ形式で、使用量を考えさせる 	一斉	※資料Ⅲ 資料集より
	地球上で人間が使える水の量はどのくらいだろうか？			
つなげる	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の最後の単元を読む 感想意見を記入 	<ul style="list-style-type: none"> 公民の教科書の最後のページを見よう 「私たちは～生き方を豊かにすることができます。」 コメントカードに振り返りをさせる 	一斉	教科書(公民) ②コメントカードによる評価
	私たちにできることは何だろうか？			
<p>「究極に身近な存在としての“水”を通して世界を見た。これまでの学習で“豊かさとは？”“かわいそうって何？”“募金はした方がいいの？”と多くのことを考えてきた。ただ、事実として…</p> <p><u>世界に貧困は実在し、飢餓や水の病気で人間が死んでいる。</u></p> <p>私たちにできることは、彼らに水を寄付することなのだろうか？ 普段の生活の中でもできることはないだろうか？」</p>				

※注釈)「飲める水道水」: 公的な機関が認定することは難しく、旅行者などが情報を集めて表した数値である。明確な基準がないことと、旅行者には個人差があることを前提とした上での“説”と理解する必要がある。

6 成果と課題

<成果>

じっくりと時間をかけて国際理解に関する学習に取り組んできたこと、また直前には、明確な答えのない問題への葛藤を経験したことから、本気で考える生徒が多かったと感じている。そして、複雑で多岐に渡る国際問題にさんざん触れてきた最後の学習が、単純に“水”、いつも使っている“水”、というギャップから興味を沸かせた生徒もいたようである。

さて、授業中にはさまざまな生徒の姿が見られた。最初に見せた unicef のリーフレットの“飲み水の色”へは感嘆の声が上がった。生徒へは印刷したものを配布したが、その色を伝えたいと思いカラーの原版を見せて回った効果があった。実際に“モノ”を見せるという点では、透明なペットボトルに水道水を5L(ケニアの1日平均分)入れただけのものへも反応があった。ただの水道水に対して「すごくきれい！」などの意見は、普段ならまず聞けない声であろう。

本時のメインの活動は、グループでの話し合いである。学習への探究心を高める上でも、仲間同士の交流から出てきた生活スタイルの相違は興味深いものであった。

コメントカードからは、地球上で使える水の少なさから実生活を省みる意見が寄せられた。分かりやすいマンガ教材を使用したことも効果があった。多数の生徒から驚きの声の他、「普段から水を大切にしたい」という趣旨の意見が書かれたことが最大の成果である。

<課題>

生徒による主体的な学習活動が少ないことが最大の課題である。「手持ちの資料を何とか教材化できないだろうか」という授業者本人の自己課題(=思惑)もあったのだが、生徒たちが自分で気付いていけるような授業展開を目指したい。

授業で扱う内容についても、相当なボリュームがあるので、焦点をさらに絞り込むか、または、もう少し時間を確保して扱うなど、思考する時間を保障する改善が望まれる。

また、実施時期については、関連する国際理解の学習を入試の間際に行うところは、正直、微妙な判断である。だが、授業者としての“想い”も捨てきれない…。

7 生徒の感想

- ◇こんなに広い世界の中で、地球上で人間が使える水が0.008%と知りすごくびっくりした。その中で日本はとてすごい国だと思った。これから、水のありがたみを感じながら生活したい。
- ◇私たちは、ほんとに世界的に見てすごい暮らしをしてる気がした。あんな色の水は正直飲めない。私たちがケニアに行くとびっくりするだろうけど、ケニアの人たちが日本に来てすごいびっくりすると思う。
- ◇総合的な学習のディベートのことと重なり、心が痛みました。だから、今、自分たちにできることを考えようという気持ちが改めて生まれました。
- ◇いつも自分が飲んでいる水。自分は、少し濁っていただけで捨てる。でも、他の国の人たちから見れば、何十倍、何百倍ときれいに見えるのだらうと思った。例えば明日、日本の水が資料で見た水と同じになったら、自分はその水を飲まないで死んでしまうと思う。それは、自分がきれいな水を飲むことに慣れてるからだと感じた。
- ◇今日の学習は、総合的な学習の内容も混ざっていたからよく分かった。自分が何気なく使っている水が、すごい大切なのがびっくりした。
- ◇今までの社会の学習の中で、今日の学習が1番印象に残った。
- ◇改めて“水”の大切さが分かった。世界できれいな水道水が飲める国が、これだけなんてびっくりした。少しでも水を大切にしようと思いました。
- ◇私は、お風呂も茶碗洗いも水を出しっぱなしにしてたので、これからは気を付けます。
- ◇汚れた水を飲んでいるのを見て、辛くなった。今、問題になっていることを学んで、何かやらないといけないな、と思った。

<部分抜粋>

<使用資料の一例>

※項目4の「本時の活動」に示した資料番号と一致する

◆資料Ⅰ：unicefリーフレット「命をくれる水、命をうばう水」

◆資料Ⅱ：癒し工房日記：一日に使う水（インターネット）

◆資料Ⅲ：『世界と地球の困った現実』 日本国際飢餓対策機構（編） 明石書店